風呂供養の話

田中貢太郎

中国山脈といっても、播磨(はりま)と但馬(たじま)の国境になった谷あいの地に、世間から忘れられたような僅か十数戸の部落があったが、生業は云うまでもなく炭焼と猟師であった。

それは明治十五六年比(ごろ)の秋のことであった。ある日、一人の旅僧が飄然(ひょうぜん)とやって来て、勘右衛門(かんえもん)という部落でも一番奥にある猟師の家の門口に立って、一夜の宿を乞(こ)うた。

その日、亭主(あるじ)の勘右衛門は留守であったが、女房と娘が出て見ると、二十六七の如何(いか)にも温厚そうな眉目清秀の青年僧で、べつに怪しいところもないので、む

さくるしい処でもお厭(いと)いなくばと云って泊めた。

やがて、帰宅した亭主も旅僧を疑わず、其の夜は、旅僧から旅の話を聞いて珍らしがった。そして、翌日(あくるひ)になったところで、生憎(あいにく)とどしゃぶりの雨になって、それがその翌日も続いたので、旅僧はしかたなく逗留(とうりゅう)することになったが、娘の千代(ちよ)は、日一日と旅僧になじんで往(い)った。また一方、旅僧の方でも、千代の美しい姿にひきつけられているようであった。

千代はまだ十六の少女であったが、その美貌(びぼう)と気だてのよさに、近在の青年たちの注視の的となっていた。

そのうちに旅僧は、べつに先を急ぐ旅でもないから、

どこか山の中に良い場所があるなら、庵（いおり）を結んで、心静（しずか）に修行したいといい出した。そして、毎日のように朝早くから家を出て夕方になって帰って来た。時として千代がその伴をして往くことがあった。

ところで、いつの間にか勘右衛門の女房は、旅僧が数多（あまた）の金を持っていることを知ったので、千代を利用してそれをまきあげようと思って、それを千代にいい含めたが、千代はてんで受けつけなかった。

一方、勘右衛門は旅僧の素性や、所業（おこない）に不審を抱くようになった。と云うのは、僧でありながらろくにお経を知らないのみか、身分不相応な金を持っているこ

とであった。勘右衛門はそうした不審を抱くとともに、そんな男に、千代を慰み物にせられては大変だと云う懸念で、頭の中が一ぱいになった。

　その勘右衛門が某日、山をおりて村の居酒屋へ往ったところで、居酒屋へ来あわせていた知り合いから妙なことを聞かされた。それは、お前の家（うち）に逗留している旅僧は、お尋ねものであるまいか。何でも政治向のことで上方では騒動があって、謀叛（むほん）を企（くわだ）てた一味の中には、殺人（ひとごろし）までしながら網をくぐって、西国へ逃げた者があるそうだ。もし、其の旅僧がそのうちの一人だとすると、早く警察へ突き出さなくてはならないと

云うような事であった。

勘右衛門はその時、女房が旅僧から金を貰い、そのうえ、千代を嫁にしたいと申し込まれていると云うことを聞かされた。勘右衛門の苦悶は絶頂に達したが、頭を痛めるのみでどうすることもできなかった。

旅僧は潔癖で、風呂が好きであった。千代はいつも湯殿へいって背中を流したり、肩を揉んでやったりした。其の夜も旅僧は湯槽（ゆぶね）につかって、気もちよさそうに手拭で肩から胸のあたりを流していた。

外には月の光が漂よっていた。と、不意に風呂場へ忍び寄った覆面があった。覆面の手には種ケ島（たねがしま）が握ら

れ、火縄の端が蛍火のように光っていた。

千代が銃声に驚いて駈けつけた時には、旅僧は胸に弾丸(たま)をうち込まれて、その血で湯を赤く染めている処であった。千代はきっと云って其処へ倒れてしまった。

殺された旅僧は、政治犯人ではなく、諸方を荒した強盗であるとのことであったが、はっきりしたことは判らなかった。

そこで、警察の方では、旅僧の死体を葬るとともに、旅僧を惨殺した犯人を捜査したが、それも手がかりがなかった。

それがために、旅僧の処置に困っていた勘右衛門に

嫌疑がかかり拘引せられることになった。哀れな千代は、そんなこんなで気が狂った。

そして、彼方此方へ往って、何処の家の風呂でもおかまいなしに覗き込んで泣いていたが、終いには空の浴槽の中へ裸体で入っていたり、万一これをさまたげる者でもあると、火をつけようとするのに手がつけられなかった。

そこで勘右衛門の家では、千代を座敷牢へ入れたが、何時の間にか脱け出して、自分の家へ火をつけて、浴槽の中へ入って焼死した。

それと前後して、旅僧を惨殺した真犯人が縊死した

ので、勘右衛門は未決から釈放（しゃくほう）せられた。犯人は千代に失恋した村の若者であった。

千代の怨霊（おんりょう）が夜な夜な風呂場に現れると云う噂がたったのは、それから間もなくであった。そのために其の部落では、各戸にあった風呂を廃して共同風呂を設け、そこで入浴することになった。

　共同風呂を設けた処は、酒や雑貨を商（あきな）うかたわら、旅籠（はたご）を兼ねている家であった。そこは裏の小川から水車で水を汲みあげるので、共同風呂の中には平生（いつも）木の葉や芥虫（ごみむし）の死骸などが浮いていた。時には小魚が泳いでいることもあった。

部落の人は共同風呂を作ったばかりでなく、千代の命日には、風呂供養とも云うべき一種の行事を営んで千代の霊を慰めたが、その日は部落の人たちは、一日じゅう行水(ぎょうずい)もしないで、風呂桶を浄め、そして、それに供えものをし、燈明をあげるのであった。それはちょうど、盆(ぼん)の精霊迎(しょうりょうむかえ)のような行事であった。長年行商をして、諸国を歩いていたKが、某時(あるとき)私に此の話をした。私は好奇心を動かして、

「その部落には、今でも其の習慣が残っているだろうか」

と云って聞くと、Kは、

「さあ、もう三十年も昔のことだから、どうですかねえ」

と云ったが、ついすると、今でもそれが行われているかも知れない。

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集3　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　１９９９（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　１９３８（昭和13）年
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年9月25日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。